2章

【問題】（演習／共通問題2）

出典…三浦梅園『梅園拾葉』　／　京都大学　前期日程　98年・改題

現代語訳

花は生けるのにも投げ入れるのにも、それぞれその作法があるというようだ。しかし片田舎にいる人〔＝私〕はそれを知らない。知らないからといって花がすばらしくないことがあろうか（いや、そんなことはない）。軒に半ば垢がついた花桶でみっともないのを、心細くも糸でかけて、（生けておく）花の多い多くない（という量）は子供や木こり等の手（が摘んで来るの）に任せたまま、捨て去ったり取り繕ったりせず、（そのまま）つかんで挿すので、（花々は）勝手気ままに咲き乱れあって、上を向くはずのものが垂れ（て下を向き）、低い所にあるはずの花が高いところにある（というように）、自分の思ったとおりでないのもまた、人の世のありさまに似通っていて趣深い。花（盛りの頃）の名残（をとどめた色あせた花）は言うまでもな（く趣深）い。枝がどうしようもなく枯れ、葉が哀れに衰えてしまったのが趣深いので、いつも蜘蛛の住みかとなるまで換えず、古い花に新しい花を重ねて〔＝生け足して〕あるので、傍目にはさぞ汚らしいだろう。隣にいる亀という子が、近頃は桜（の枝）を惜し気もなく折り取って来て、元という子に生けさせていたのが、風に吹かれて、手紙の端や硯の面に散りかかって、人〔＝私〕の心を困らせたのも、いつのことか昨日（のような）昔であって、その後は若葉が、わずかな（花桶に残った）水を（それがなくなるまでのわずかな）命とも知らず、緑（の青葉）を増し、花のめしべが優美に残っている。過ぎ行く春の形見と思うと、どうして捨て去ることができようか（いや、できない）。蝶や蜂がいつも来慣れて（いるのに）、花を捜して迷っているのも気の毒で、椿やしゃがなどの花を折って添えると、彼らもところを得たように遊び戯れている（のを見）つつ、「万物静かに……この世のあらゆる物事を静かに眺めてみると、皆それぞれ、それなりのあり方で安らかに存在している」という言葉を思い出して、口ずさんだ。その（花の）枝を曲げ、葉を減らし、花房を摘み取り、色あせるとすぐに無情に捨てるようなやり方を残念だとは、私一人が思うことであろうか。

解答

問1　(1)花桶に挿す花の量を自分は気にせず、作法を心得ない子どもや木こりが摘んで来るのに任せておくということ。〔50字〕

(2)枯れた花でも盛りの頃の雰囲気が残っていると、盛りの頃と同様、趣深いのは言うまでもないということ。〔48字〕
(3)枯れ衰えた古い花が挿してある花桶に、新鮮な花を挿し足すと、傍目にはさぞ汚らしいだろうということ。〔48字〕
(4)桜の花は、散った後、花桶に残る僅かな水がその命を支えているとも知らず、青葉をつけているということ。〔49字〕

問2 無造作に挿した花々の不揃いに咲き乱れる様子が、各々別個の生き方をする人の世に似通っていて趣深い。〔48字〕

問3 生け花の作法通り、盛りの状態だけを作為的に見せる花の生け方を、自然のままの趣が失われていて、残念に思う。〔52字〕

【問題】（自習／共通問題2）

出典…本居宣長『玉勝間』　／　奈良女子大学　00年

現代語訳

すべての書物について、印刷本と書写本との長所短所を言うなら、まず、印刷本の手に入れやすく便利なことは、言うまでもない。しかしまた、最初に板に彫る時に、書籍商人の手で、本文の良し悪しも吟味しないで彫ったのは、言うまでもないが、（ある程度）物を知っている人によって選ばれたものも、やはり間違いが多いのに、一度板に彫って印刷本が出来てしまうと、種々の書写本は、自然と廃れて、絶え絶えになって、（その印刷本）一つに定まってしまうが故に、誤りのあるのを他の本によって訂正しようとしても（他の本が）簡単には手に入れにくい、これは印刷本があるのが悪いのである。わが国の書物は、だいたい元和・寛永の頃〔＝十七世紀前半〕からしだいに板に彫るようになったが、どれも本文が悪く誤りが多くて、（その印刷本とは）別に良い本文を手に入れて訂正しなければ、物の役にも立ちにくいものまでも多いのは、たいそう残念な事態であるよ。さて、印刷本でない書物などは、書写本はいろいろあるので、誤りはあるけれど、あれこれを見合わせ（て校合す）れば正しい内容を手に入れられる、これは書写本で伝わる（ことの）一つの長所である。しかし、書写本はとりわけ入手困難なものなので広まらないで消滅しやすく、また、書写するごとに、誤りも多くなり、また、心ない商人の手によって（書写が）なされたのは、利益ばかりを考えるから、あちこちを密かに省略したりして作るので、完全に良い本はたいそう稀になっていくばかりであるようだ。だから、たとえ悪くはあっても、やはり種々の書物は、板に彫っておきたいものである。特に『貞観儀式』『西宮記』『北山抄』のようなものや、その他も、昔の優れた書物が依然として書写本だけで（伝わって）存在しているのが多いのは、何とかしてすべて板に彫って、世に広く普及させたいことである。家々の記録書なども、次々に（板に）彫りたい。今の世の中は、大名たちなど（の中）にも随分と古い書物をお求めになる方がいるけれど、ただその家の蔵に収めて集めて置かれるだけで、（その書物を）見る人もなく、流布しないので、世のためには何の利益もなく、存在するかいもない。もし本当に古い書物を賞美なさる気持ちがあるならば、このようなすばらしいご時世の証として、大名たちなどは、専門家にお命じになって、他の本などを読み合わせ、良い本文を選ばせて、板に彫らせて、世間に広めなさったなら、何事にもましてすばらしく、末代までのたいへんな功績であるにちがいない。財力の豊かな人にとっては、この程度の出費は、何というほどのこともなく、その功績は、天下の

人がたいそう（その）恩恵にあずかって、後世まで残ることであるよ。重ね重ね、（このような）志のある人がいればいいなあ。

解答

問1　「書」は書物を印刷本や書写本という形態の面から捉えたものであるのに対して、「本」は古典作品などの本文を意味し書物を内容の面から捉えたものである。〔72字・解答例〕

問2　**3**　一度板に彫った印刷本が世間に流布してしまうと、人々がその印刷本を用いるために、種々の書写本がすたれてしまい、その結果、本文がその印刷本一つに決まってしまうということ。〔83字・解答例〕

4　様々の書写本を見比べて校合すれば本文の正しい意味が得られるということ。〔35字・解答例〕

問3　**5**　何とかしてすべてを版木に彫って、世間に広く流布させたいものである。

7　財力の豊かな人にとっては、蔵に埋もれている良書を専門家に命じて校合させたうえで印刷して世間に流布させる程度の費用は、何というほどの事でもなくて、

問4　(a)　物知り人

(b)　書誌学や古典文学などの知識を備えた専門家

問5　(a)　手に入りにくい書写本のすべてを版木に彫って印刷本にして残す形態〔31字・解答例〕

(b)　専門家によって校合して選定された良質の本文を印刷本にして残す形態〔32字・解答例〕

解説

問1　まず、設問に「どのように違うか」とあることに着目しよう。古文に限らず、入試国語では「AとBの違い」を求められることが多いが、このような場面に遭遇したら、あせることなく「Aは～であるのに対し、Bは…である」という答案形式にまとめていくようにするとよい。つまり、本文中から「～」「…」に相当するポイントを探せばよいのである。

さて、この設問だが、ここでは冒頭の数行がヒントになる。「書」については「刷り本」や「写し本」が話題に挙がっているのに対して、「本」についてはそれじたいの良し悪しが問題になっているようである。以下の文章を読み進めてみても、「もの」としての本と本の内容とが論じられている。したがって、両者の違いは「書」が本の外形的な側面をいうのに対して、「本」がその内容面をいっているのだと理解できる。

設問では両者の「相違」が求められているのだから、違いが明らかになるように右の点をまとめること。解答例では「形態」と「内容」という言葉で両者の違いを強調してみた。

問2　**問3**が「現代語訳」を求める設問であることに鑑みれば、ここで大学が求めているのが単なる現代語訳でないことは明らかであろう。一般に、古文において傍線部の内容説明が求められる場合というのは、現代語訳させただけでは受験生が傍線部の意味を十分に理解できているかをチェックできない場合である。逆に言えば、このような設問では現代語訳をベースにしつつも、もう一歩踏み込んだ説明をしないと得点にはならないということである。この点に注意しながら考えていこう。

3の現代語訳は「一度板に彫って刷り本が出現すると、様々の写本は自然にすたれて絶え絶えになり、ただ一つに決まる」というものである。この現代語訳のままで分かりにくいのは、最後の「ただ一つに決まる」という部分であろう。したがって、この点を明確にしてやれば大学の要求を満たした答案ができるはずである（右にも述べたように、この点を明確にしてほしいから大学は「現代語訳」ではなく「内容説明」を求めているのだ）。では、ただ一つの何に決まるというのであろうか。これは前後の内容を手がかりにしてやれば、「いったん刷り本が世間に出回ると、他の写本がすたれてしまい、その刷り本だけが流布するようになる」ということだとわかる。したがって、この答案は、右の現代語訳をベースにしつつ、その点が明らかになるようにまとめるべきである。

4の現代語訳は「これやあれを見合わせると良いことを手に入れる」である。ここでは「これやあれ」の指示内容及び「良いこ

とを手に入れる」という内容が分かりにくい。そこでこれらを明らかにしていくのだが、まず指示内容から考えよう。これは直前の「写し本はさまざまあれば」がヒントになる。「写本はいろいろあるので、これやあれを見合わせる」という文脈の流れから考えると、この場合の「これやあれ」とは「様々の写本」ということになる。また、次の「良いことを手に入れる」だが、「様々の写本を見合わせた結果手に入れるものは…」と考えれば、「本文の正しい意味」が決定されるということだと判断できるだろう。以上の二点を明らかにして答案をまとめる。

問3　**5**のポイントは「いかで」。この「いかで」は、《願望・意志》と呼応して「なんとかして～」という意味になる場合と、《疑問・反語》と呼応して「どうして～か」という意味になる場合がある。この場合は、希望の助動詞「まほし」と呼応して「なんとかして」と訳す場合である。したがって、「なんとかしてすべてを板に彫って、世間に広くなしたいものである」くらいの逐語訳ができあがる。あとは「世間に広くなす」の部分をもう少し分かりやすくすれば完成である（この場合は、省略文節の補充も指示語の明示も必要はない）。

7の逐語訳は「財力の富んでいるような人にとっては、この程度の費用は、なにほどのことでもなくて」となる。ここまでも特に注意すべきポイントはない。むしろこの設問のポイントは、「かばかり」という指示語を具体的に説明する点にある。これは文脈をたどってくると、直前の「その道の人に仰せて、あだし本どもをもよみ合せ、良きを選ばせて、板に彫らせて、世に広めたまはむ」を指していることが分かる。したがって、右の逐語訳にこの部分を合わせて答案を作成する。

問4　「その道の人」とは、「その道の人に仰せて、あだし本どもをもよみ合せ、良きを選ばせて、板に彫らせて、世に広めたまはむ」という内容から推すに、本をいろいろ見合わせて正しい意味を決定する力を持った人、すなわち、本の校合に関する専門家のことだと理解できる。本文中からそのような意味で用いられている語句を探すと、3行目「物知り人」が見つかるはずである。

また、その意味であるが、右にも述べた通り「本の校合に関する専門家」ということになる。もう少し詳しく説明するのなら、本の内容の良し悪しをも見分ける力のある人物なので、「書誌学や古典文学などの知識を備えた専門家」くらいになるだろう。

問5　本文の構成を大雑把に確認しておくと、前半部では、「書」の継承の現状についての問題点が指摘されており、後半部で筆者（＝

本居宣長）の意見が展開されている。したがって、設問のヒントになるのは、本文の後半である。そこで後半部に目をやると、筆者が主張する「書」の継承のあり方は、11行目以降に「されば、たとひ悪しくはありとも、なほもろもろの書は、板に彫りおかまほしきわざなり。ことに貞観儀式・西宮記・北山抄などのたぐひ、その他も、いにしへのめでたき書どものなほ写し本のみにてあるが多きは、いかでいかでみな板に彫りて、世に広くなさまほしきわざなり。家々の記録書なども、次々に彫らまほし」と述べられている。また、16行目以降の「その道の人に仰せて、あだし本どもをもよみ合せ、良きを選ばせて、板に彫らせて、世に広めたまはむ」も、筆者の主張する「書」の継承のあり方である。

したがって、以上の二点が設問の答えとなる。あとは、どちらが「最も理想的な形」かを判断するだけだが、これは両者の内容を比べればよい。筆者は3行目で「物知り人の手を経て選びたるも、なほひがごとの多かるを」と述べているのだから、当然、できることなら全ての写本を板に彫りたいと考えているはずである。したがって、「みな板に彫りて世に広くなす」という前者が最善の方法、「その道の人に仰せて良きを選ばせて板に彫らせて世に広めたまはむ」というのが次善の方法だということになる。

●メモ●